

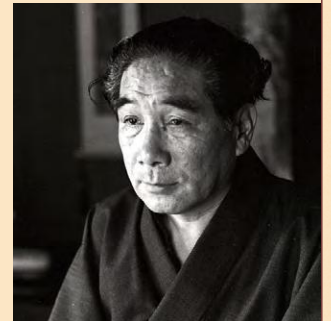
武蔵野 ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ

江戸川乱歩の誘いで上京
都心の喧騒から離れ
農村の面影が残る吉祥寺へ

横溝正史は、明治35（1902）年、兵庫県神戸市に生まれました。高等学校を卒業後、銀行に勤務しながら雑誌に応募した『おそろるべき四月馬鹿』という小説で早くも注目を集めます。その後、大阪薬学専門学校（現・大阪大学薬学部）を卒業して実家の薬局で薬剤師として働いていた時、東京に住む作家・江戸川乱歩の誘いで上京。大正15（1926）年のことでした。

「おそろく乱歩が東京からチョッカイを出さなければ、私はそのまま流行らない薬局の主人として生涯を終ったであろう。」と、横溝は自著『探偵小説五十年』の中で振り返っています。上京した横溝は、乱歩の口利きで出版



©文藝春秋/amanaimages

横溝正史と吉祥寺

名探偵・金田一耕助が活躍する推理小説で知られる作家・横溝正史。『本陣殺人事件』『八つ墓村』など、岡山県を舞台にした作品が有名ですが、横溝が戦前から戦中にかけて吉祥寺に住んでいたことをご存じでしょうか。吉祥寺での暮らしが横溝の思考や創作にどのような影響を与えたのか、その足跡をたどってみましょう。

社・博文館に入社し、雑誌『新青年』の編集に携わることに。当初は現在の新宿区神楽坂に下宿し、その後、結婚を機に文京区小石川に新居を構えます。横溝が吉祥寺に移り住むのは、新雑誌『探偵小説』の編集長に就任し、子どもが生まれた昭和6（1931）年の秋のこと。この年の夏、横溝は肺結核の症状と見られるかっ血を起こしています。世界恐慌や満州事変など激動の時代に向かう最中、横溝一家が当時まだ農村の面影が残るのどかな吉祥寺で暮らし始めたのは、横溝自身の静養と子育ての環境を考えてのことだったのでしょう。

吉祥寺に住み始めてすぐに一度転居をしたそうですが、その転居先は現在の吉祥寺本町4丁目辺りだったようです。横溝の家の向かいにはマルクス経済学の権威で一橋大学名誉教授だった

大塚金之助が住み、近隣には言語学者・金田一京助の弟、安三が住んでいたといえます。しかし、横溝の体調は芳しくなく、昭和9（1934）年には本格的な療養生活のため一家で長野県諏訪市に移住、療養と執筆を両立させながら、昭和14（1939）年の暮れに再び吉祥寺に戻ってきました。

吉祥寺での戦争体験は
その後の横溝作品にも
大きな影響を及ぼす

吉祥寺に戻ったのは、長女の女学校入学の時期だったからだといえます。1年生の時に通ったきりだった小学校へ、6年生の3学期に編入できたものの、進学すべき女学校は自分たちで探すしかなく、横溝のつてを頼って長女は武蔵野女子学院（現・武蔵野大学中

学校・高等学校）に入学。「さいわい場所が武蔵野であり、（中略）通学にも便利であり、郊外のことだから敷地も広く、おくればせながら引き揚げてきた娘には、もったいないような学校だった。」（『探偵小説五十年』より以下同）と、横溝はその時の様子をつづっています。ところが、昭和16（1941）年、太平洋戦争の火ぶたが切られてからは、学生たちは近くの軍需工場に学徒勤労動員され、学業どころではなくなりました。武蔵野女子学院のそばには中島飛行機武蔵製作所があり、横溝の長女もそこに学徒勤労動員されていたといえます。ゼロ戦のエンジンなどを製造する中島飛行機武蔵製作所は米軍の空襲の標的とされ、度重なる爆撃にさらされました。

「長女の徴用されているその工場と私の家とは、歩いて四、五十分とい

中島飛行機武蔵製作所西工場の屋上に集合する武蔵野女子学院から動員された女生徒



う距離だから、空襲警報が鳴りわたると同時にわれわれ夫婦は防空壕に身をひそめ、ちかくに聞こえる爆音に呼吸をひそめていたものである。この空襲で長女の学友の多くが散った。」と横溝は空襲の恐ろしさについて記しています。一方で、「多少そういう状態を、被虐的に楽しんでいた気味もなくなかった。」といい、家の上空で米軍と日本軍が激しい空中戦を展開した際、「電気蓄音機を最高音にあげて田園交

響曲をかけていた。幼い次女をおびえさせまいという配慮からでもあったが、ヤケのヤン八も手伝っていたのであろう。」と述懐しています。

横溝は、ぎりぎりまで疎開する気はなかったといいますが、昭和20（1945）年3月10日の東京大空襲を機に心境が変わり、一家は4月、親戚を頼って岡山県吉備郡（現・倉敷市真備町）へ疎開することに。岡山行きについて横溝はこう記しています。「どう考えてもこの戦争はヤマがみえていた。戦争が終わったら探偵小説も復活するだろう。そんな場合、瀬戸内海の小島を舞台に書いてみたらどうかと漠然と考えていた私は、矢も楯もなくそこへ行ってみたくなった。」

こうして横溝は岡山県に終戦まで疎開し、後にその岡山を舞台にした推理小説で人気作家になっていくのです。では、吉祥寺の家はどうなったのかといえ、疎開する前、ほかの人に貸したままとなり、終戦後、東京に戻った時には世田谷区成城に住むことになりました。横溝が吉祥寺に住んだのは、途中、諏訪に移った期間を入れて14年。編集者として、作家として、戦前から戦中へと日本が大きく揺れ動く時代に住んだ地が、その思考や創作に影響を

与えなかったはずはないでしょう。

吉祥寺を舞台にした作品も

そして金田一耕助命名の
意外な真相とは

岡山を舞台にした代表作と比較すると知名度は高くないものの、横溝作品には吉祥寺が舞台として登場するものも少なくありません。例えば、横溝が諏訪で療養中だった昭和11（1936）〜37）年に書いた傑作との呼び声が高い『真珠郎』では、信州とともに吉祥寺が登場します。あるいは、戦後まもない昭和22（1947）〜48）年に書いた名探偵・金田一耕助シリーズの初期作品『殺人鬼』では、終戦直後の吉祥寺の混とんとした様子が描写されています。作中に登場する推理作家・八代竜介の住まいは「成蹊の手前」の「Y小路」と設定され、吉祥寺駅で出会う謎の女性・加奈子の住居は「成蹊の原っぱのほとりに、一軒ポツンと建っている和洋折衷の家」とされています。また、金田一耕助が戦地から復員したという設定もあり、金田一シリーズには復員兵が重要な役回りとして多く登場するなど、戦争の影響が物語に色濃く反映されています。横

溝自身が戦地に赴くことはありませんでしたが、武蔵野市での苛烈な戦争体験が自身の作品に影響を与えたであろうことは想像に難くありません。

ところで、前述のとおり、吉祥寺の横溝家の近隣には金田一京助の弟・安三が住み、戦時中はいわゆる「隣組」として消火訓練などを行う関係だったといいますが、実はそれをヒントに金田一耕助の名を付けたと横溝自身が書いています（『金田一耕助の帰還』より）。ひょうひょうとしながらも頭が切れる金田一のキャラクターについては『君の名は』『放浪記』で知られる劇作家の菊田一夫や、金田一が初めて登場する『本陣殺人事件』が掲載された雑誌『宝石』の編集長・城昌幸などを複合して生み出したようですが、名前については、菊田一夫の「菊田一」と金田一京助をミックスして付けたようです。吉祥寺と金田一耕助には、実は意外なつながりがあったのです。

作品の舞台を巡る、いわゆる「聖地巡礼」が可能なほど、作中では具体的なまちの描写は多くありませんが、横溝と吉祥寺の関わりを知り、小説を読み、街を歩くと、いつもの風景もまた違って見えてくるのではないのでしょうか。